

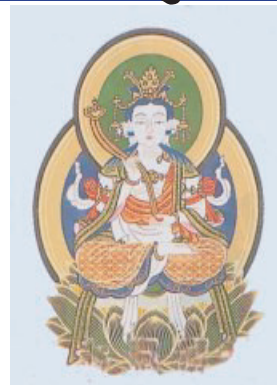
七高僧シリーズ その2

第二祖 天親菩薩(てんじんぼさつ)

4世紀～5世紀頃(日本は古墳時代、大和朝廷の頃)

著作:『浄土論』

特色:阿弥陀如来におまかせする一心の信心の大切さを教え、すすめた。(宣布一心)



略伝

七高僧の第二祖天親菩薩は、インド名をヴァスバンドゥといい、訳して天親といいますが、一般には世親という訳名がよく用いられます。

小乗仏教について五百部、大乘仏教について五百部の論(注釈書)を造ったといわれ、「千部の論主」と称されています。

世親は北インドに生まれ、兄弟三人そろって仏道に入りました。

最初、小乗仏教を学び、その広い学識をもって大乘仏教を厳しく批判しました。彼は、「大乘は釈尊の説いたものではない」と主張したので、後に大乘仏教に転じましたが、それには次のような話しが伝えられています。

世親の兄の無著菩薩は、すでに大乘に帰して諸国で説法をしていました。彼は、弟の世親が小乗にとらわれて大乘を悪くいうのを少なからず心配していました。たまたま、世親が近くを通ることを知った無著は、一計を案じ、弟子に、「兄の無著菩薩が危篤だ」と伝えさせます。驚いて駆けつけた世親に向かって無著は言います。「わしは心の病気じゃ。その原因はお前なのだ。お前は小乗にこだわりすぎ、大乘の何であるかをまったく知ろうとしない。そのためにお前が将来大きな苦を受けるだろうと思うと、心が安まらんのだ」

無著は世親に大乘の教えを諄々と説いて聞かせました。世親は大乘を誹謗した自らの誤りに少し気づきはじめます。その日は兄・無著のところに泊まることになりました。深夜、人の声がします。目をさまして静かに聞いていた世親は翻然として、大乘の教えのすばらしさに気づいたのです。世親が聞いたのは無著の弟子が大乘経典を読誦する声だったのです。世親は直ちに大乘に帰するとともに、今まで大乘を誹謗したことを大いに懺悔し、大乘を誹謗した自らの舌を断ち切ろうとしました。その時、兄の無著は「舌を断ち切っても真の懺悔にはならない。本当にすまないと思うのであれば、大乘を誹謗したその舌で大乘の教えを生命をかけて、説いていくべきではないか…」と諭したといわれています。

非常に聡明であった世親は、後に兄をしのぐ大乘仏教の学僧になりました。大乘をそしる舌を、大乘を弘める大舌に変えたのでした。



住職レター

気付けば、もう今年がスタートして、一か月がきます。相変わらず、年始から慌ただしく過ごし、御正忌法要を勤め終え、今後は護持会役員会、仏教婦人会役員会と続き、その後はそれぞれ総会を開催します。有り難いことに、今年は寒さの厳しくない冬ですから、何かと億劫にならず物事をやれている感じがしています。

しかしこの異常な暖冬、雪も降らず、このままで良いのでしょうか？

田んぼには雪が降り積もらないと、害虫が死なず、春先には農薬が多く必要になると聞きました。雪が降らないので、田植えの時期には、水不足も心配だそうです。

生きておりますと、何かと心配事は尽きませんね。

さて最後に一つ、報告です。昨年末の墓苑参道の整備に続き、この度、自転車&バイク置き場を整備しました。屋根付きです。少々の雨でも心配ないですよ。自転車&バイクでのご参拝、お待ちしておりますね。